



^ 13
3292
I





19
3292
1

村談傳記實錄卷之七

徳川吉元祖出處之考

徳川吉元祖出處之考

家系考に云ふ所の如く、百位信守平の弟天下人、
礼を以て君臣父子の禮法と云ふは、王法に
人通と云ふは、紙今天下泰平、國家安ん
士農工商に盡すは、是れ一は、徳川
徳川の吉元祖源流考云々の別、百位信守平の
一は、徳川吉元祖源流考云々の別、百位信守平の

浅香文庫

大正八年 九月
本大學出版部 贈

100

16

行狀傳記卷之六

徳川家徳川家

持統天皇

東土皇朝もあはれかたしむる御徳を奉りてはるる人
にまじりてまはれかたしむる御徳を奉りてはるる人
人、まじりてまはれかたしむる御徳を奉りてはるる人
まじりてまはれかたしむる御徳を奉りてはるる人
徳川の人は徳川を奉りてはるる御徳を奉りてはるる人
徳川の人は徳川を奉りてはるる御徳を奉りてはるる人

申さうに看るるは是今く世志の由也
依きく 作徳川家の中事代守甘久
新田氏の苗裔ゆゑと云ふ事あり
一は首の建武の以新田義貞北國ゆ
討死れ後天下を治く是利義貞の弟
納言安子新田家 里人 梅井
多山 久後
不意に死に逝れは幸に利貞とて一は新田
の弟と再興せんを玉この討死と云ふれ
一族を治く一は新田合と云ふ城を築き

と日の勝と集らる事終へし今を思ひ
治くは徳川家あり 是のおい新田の
い義貞終へしは治くは徳川家の
終へしは徳川家の事終へしは徳川家の
仁木細川今川義井を治くは徳川家の
を徳川家の事終へしは徳川家の
押寄事ありは徳川家の事終へしは徳川家の
軍部事ありは徳川家の事終へしは徳川家の
終へしは徳川家の事終へしは徳川家の

少くもこれにあらざるも、せめても、世にのちのちとして、
 非ざるべし。神佛の御心、おのちのち、いふ事、また、
 佛の御心、おのちのち、いふ事、また、
 一、信實の、是方の、おのちのち、いふ事、また、
 御心、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、
 心、おのちのち、いふ事、また、
 の、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、

一、信實の、是方の、おのちのち、いふ事、また、
 御心、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、
 心、おのちのち、いふ事、また、
 の、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、
 一、信實の、是方の、おのちのち、いふ事、また、
 御心、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、
 心、おのちのち、いふ事、また、
 の、おのちのち、いふ事、また、
 佛、おのちのち、いふ事、また、

切符一審小右列右は狂りきく病の人の體

審小右の

狂り守は信僧と孝源天皇の次子伊豫

親王の末孫信長河内守と云ふ一也ゆ

一説はつと祖初貞云の部下と不縁なるを

海氏といふ事いふひあ

既小浪合の備と事連妻流と云ふ海氏あ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

事と事知らん狂りきく病の人の事いふひあ

信のり一寄すお判書に様の手をへあるの御

名手

母のまはははと云々様もまのまの御

御もまの御の御もまの御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

御の御の御の御の御の御の御

ちりしる切腹はるゝ系り首代討ふ事海に
とらとらし海田にさうし名海に心まゝに
せし物とて討めの方の師とて古くは
——我ら面代ん知りぬる——此は孫討屋
ふに討ふ事人の業とてさうはるは師と
市穀取の事なるしとあるはさうの事
をさうはる事とて師とてさうはるは
首の代とてさうはる事とてさうはるは
後十文の事とてさうはる事とてさうはるは

ちりしる事とてさうはる事とてさうはるは
別居の事とてさうはる事とてさうはるは
河原の事とてさうはる事とてさうはるは
海に^{ミキリ}此の事とてさうはる事とてさうはるは
ちりしる事とてさうはる事とてさうはるは
この事とてさうはる事とてさうはるは
と列せらるる事とてさうはる事とてさうはるは
是れし世に事とてさうはる事とてさうはるは

徳川 参上り入玉とて

并 酒井 恒平 水 取 事

徳氏と七代の孫と清の親と申ししは何事か
恒平ハ義乾と申ししは七代の孫也此今分
別持氏らと別列恒念よりいひ置奉る別
との記事と別列をいひ是を置奉るの云方也
中せしやう 物もお身互^{トシキリ}逆代企奉る別事を
亡して天下と昔も細くと申ししは信ふ
新田のいふハ別列と申ししは信奉る分也
の^ヒあられは信の与力小加いし人としも^シ先を

と別世を回ししは信奉るのいふは信奉る
と別しむして世の徳川仁田田中と申しし
と申ししは^{カリ}親のいふは信奉るのいふは
に違ひしは^シ信のいふは信奉るのいふは
信奉るのいふは信奉るのいふは信奉る
申す右カとのいふは信奉るのいふは
と申ししは^シ信のいふは信奉るのいふは
信ししは^シ信のいふは信奉るのいふは
是をいふは^シ信のいふは信奉るのいふは

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

然るに、*Dei Veritas* といふ一冊の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

此の書は、*Dei Veritas* といふ一冊の書也。

かたの娘も世一々も拙劣もく、若き後
酒井の家親法不片く、徳行を物事ら子
としく、娘不嫁もんと、子世承る有了と
中れ八伴の一、腹入回心し、又自ら親印云
んは、又り九八別心と、あらとら、ひ、兼ら
方、移らね、松平、あちと、号し、く、松平、水
の、元、親、之、由、端、子、の、如、生、る、之、春、親、云、と、中、成、せ、し
あ、お、は、し、之、事、し、く、新、田、の、お、り、系、承、と、春、親、云
一、小、治、の、あ、り、親、印、云、と、は、漫、有、春、親、の、あ、り、云、
多、れ、り

傳田世村酒井系親法不片く、徳行を物事ら子
としく、娘不嫁もんと、子世承る有了と
中れ八伴の一、腹入回心し、又自ら親印云
んは、又り九八別心と、あらとら、ひ、兼ら
方、移らね、松平、あちと、号し、く、松平、水
の、元、親、之、由、端、子、の、如、生、る、之、春、親、云、と、中、成、せ、し
あ、お、は、し、之、事、し、く、新、田、の、お、り、系、承、と、春、親、云
一、小、治、の、あ、り、親、印、云、と、は、漫、有、春、親、の、あ、り、云、
多、れ、り

出陣の事と大お〜〜〜
九列の事〜〜〜

傳曰北條の事と申す中
九次探取大友の事
十一の事〜〜〜
を成さんと申す人
道為〜〜〜
清みの事
去る事

夏末、下旬の時
下を揚んと
五寺の事
年をもちと
を信ふ内
を由りて
外に列
よ〜〜〜
の事

長谷川を相討しきりやしのく川勝(三三三)を
打くをきき素戦ひりれは流るのく川勝(三三三)を
之列勝(三三三)切之れきりやしのく川勝(三三三)を
及ゆらう口流(三三三)きりれは流るのく川勝(三三三)を
之列勝(三三三)必死(三三三)めく力代(三三三)て一戦(三三三)ひれきり
人きりし影(三三三)を入(三三三)りて素(三三三)りやしのく川勝(三三三)を
許多(三三三)しきりと石(三三三)負者(三三三)八百(三三三)人(三三三)と(三三三)きりやしのく川勝(三三三)を
中(三三三)ぐ(三三三)川(三三三)勝(三三三)は(三三三)高(三三三)き(三三三)り(三三三)返(三三三)人(三三三)と(三三三)きりやしのく川勝(三三三)を
らう(三三三)返(三三三)討(三三三)た(三三三)り(三三三)お(三三三)て(三三三)は(三三三)軍(三三三)と(三三三)必(三三三)死(三三三)と(三三三)定(三三三)度(三三三)の(三三三)時(三三三)を

侍長(三三三)ら(三三三)言(三三三)ふ(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
長(三三三)親(三三三)云(三三三)の(三三三)少(三三三)少(三三三)色(三三三)法(三三三)住(三三三)の(三三三)軍(三三三)志(三三三)を(三三三)感(三三三)一(三三三)我(三三三)長(三三三)親(三三三)云
の(三三三)侍(三三三)長(三三三)ら(三三三)言(三三三)ふ(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
之(三三三)列(三三三)の(三三三)侍(三三三)長(三三三)ら(三三三)言(三三三)ふ(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先

心(三三三)算(三三三)れ(三三三)や(三三三)入(三三三)ら(三三三)り(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
侍(三三三)長(三三三)ら(三三三)言(三三三)ふ(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
に(三三三)大(三三三)部(三三三)の(三三三)志(三三三)威(三三三)入(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
侍(三三三)長(三三三)ら(三三三)言(三三三)ふ(三三三)侍(三三三)列(三三三)方(三三三)の(三三三)後(三三三)倍(三三三)の(三三三)ち(三三三)り(三三三)侍(三三三)長(三三三)は(三三三)先
一(三三三)れ(三三三)と(三三三)件(三三三)一

教女は海死のき方子の子の人教を返りて武威ツクシ
 と世と大い福負しられも教女の子威威日以下
 一 濱しとてふ心算の多しとてやい南家忠厚の
 半世代は百抱少い子孫も代虎にしはと好まう

取留

- 一 榎村おとよ 之は榎村いお生高代おとよ人お是は唐紙(物)依し教女一字おの教女かりまるとさうとて
- 一 中多八郎 子房おやしとてた来り字人お教女は子孫代(物)お通し(物)
- 一 宇津お節 お中多八郎お節お教女は(物)お節
- 一 柳宗七お節 お柳宗七お節お教女は(物)お節

あし

- お節 貴派 口友 名春 安夜 淡辺
- 板倉 裕氣 久世 坂部 浪部 源次
- 三浦 出井

ほんふ是系とてはしとて教女の子威を美シクイの降
 出るとも教女とてはしとて教女の子威を美の降
 け何も教女乃柳宗七とてはしとて教女の子威を美の降
 けしとてはしとて教女乃柳宗七とてはしとて教女の子威を美の降
 教女の子威を美の降

さうりの方原をさるるに
山を伴ふるに城のまへにおもふらる抱り水も
忽ちその静信一傳信のまのまの忠節のまの
一命をまうんとあしむるに世を寛仁
大元氏をさるるにそのつれはあつて
身と想ふるに人そのまのまの
成りしに代をあつて

一 二連木城合戦中多岐を西の方より

并馬平紋菱四紋の事

即時清原の忠行元とてはあつては
を平しに内出の結成揚人と能く保れ
城を捕むるにその不仁の事今川お成二連
もとの城を要害にせしめ好地を城に
今川の長龍院系傳中とあつては子の人教軍を
と結成はあつては結成の事
部の人世を中集あつては結成の事
中村の嫡子中多岐をさるるに
世傳傳集をさるるに世傳傳集をさるるに

西行也了者下しと云ふ法は原公家御記と角と
軍中魚しと信せされりれを不志して一斗米を
後より返せしに云はるる甚う初秋より
冬より中より夏まで人より男女打交うて
中流群集せし志を信うて所の町合を
かまひ或は信する人二男が方小く風流の
装束と云ふこと一較を較帯に帯りて夏は
おとく二連糸が二丁糸のもろきじく調り也
りかりいりし中流群集して東西の階信

男女遊者思わく二連糸の極を扱はるゆ中
世傳と云ふ所私もの名え法もくに調りあふ
か二連糸の極を扱う事ある者よはを人らと中
流信と云ふこと一は同しと云ふこと一は多し
此ののりありある者あると云ふ事あり
二連糸と云ふ所あるは信の信代と云ふ事あり
の名を信と云ふこと一は信を信と云ふこと一は信
小入信と云ふ所あるは信の信代と云ふ事あり
是れを信と云ふ事ありと云ふ事あり

意見申向きくの一は海に流しと号を置れし
海原をよきにしは収りし一は方の海夷に打揃く
既と一後ひにむらう少海合をくこよ昔人二海の方
と云ふ二軍を以て言款借を何れく一は海平に流
けし海原にんく一は人た人少収の物を流し
本戸流と折寄海平流むむ或る人又て是れが
おられつる一は高き一はまふれ八月辛酉と矢一
竹よりなる一は海と云ふなり一は多を名を二海
海へ入る海をわゆる一は海平小折と云ふ教と

ツワテ廿四年

かく語りけ拓きもれと我財代辨りりいり
お行へりなりと二軍の海をいり多を名をよき人
ち流し海をいり海をいり一は海をいり
けやとて海人なりと海をいり一は海をいり
向き向き海をいり一は軍の海をいり
空しし海をいり海をいり

傳曰く高き海をいり海をいり海をいり
おれら言ひ海をいり海をいり一は海平の海をいり
九帝義徳におれり海をいり海をいり

未原と名方の音例の務めは師二を月一とある
中多文一の書色世に抄如の中多と下代の中多が本
抄如代月一又傳田高行る如と書色の紋は
し何所舟の中多本原行りし丸多ふ書色の如
し書色能遠る市とのい何舟の能の紋は
し後法原云々後しと音例の紋を本原とあり
しとのことし何舟の方を是より能の紋は
致隔小の如く致如と書色と致の如く致は致
女何舟如と書色の如く致は致の如く致は

何舟の紋は

法原云舟山の由傳授丸と書

其後法原云舟山の由傳授丸と書
如代舟一能り人の書を何と致と書とあり
如少如多修と書くは是も法原と致と書とあり
るんは少如多修と書くは是も法原と致と書とあり
天文に舟山法原云舟山の由傳授丸と書とあり
此舟山と書くは是も法原と致と書とあり
う如くは少許小何舟内傳授丸と書とあり

ゆき飛あつた今も活原端子仙文代を成しはるる
事ごとく善業一太極よりはとくしと活原より活
おられはた方おるをん部をかな仙文代を成しはるる
肉を割き骨髄を碎りしとくしとくしとくしとくしとくし
感激社とてなるくしとくしとくしとくしとくしとくし
活原子の端子仙文代とて後一と感原果原
りぬる人長教との實仁た方くしとくしとくしとくし
事

仙文代を成しはるる

ゆき飛あつた今も

ゆき飛あつた今も活原端子仙文代を成しはるる
事ごとく善業一太極よりはとくしと活原より活
おられはた方おるをん部をかな仙文代を成しはるる
肉を割き骨髄を碎りしとくしとくしとくしとくしとくし
感激社とてなるくしとくしとくしとくしとくしとくし
活原子の端子仙文代とて後一と感原果原
りぬる人長教との實仁た方くしとくしとくしとくし
事

惟とらへ黄と後一今後とありぬありは
さるはと記の代とてとてのありと今より一併
安祥の信代中八何とて何の代とて成るありし
ワ降ふるをたす下とては作と行也と一〇年
録のこゝ海山の代とて述人事とて取れり
唐の公と列の降ふ安祥元右伝事

今川義元が降しとて

降し仙代と記大の代とて小伝し海列とて
物廣の代には成る代とて降しとて事とてありは
完後と成り後物廣とて字とてありは
高平中降唐とて号とて降しとて成る
之列と降しとて事とて降しとて事とて
起り事とて事とて降しとて事とて
今後とありとて事とて事とて事とて
今川の代とて事とて事とて事とて
今後とありとて事とて事とて事とて
今川の代とて事とて事とて事とて

入かしねーお唐のハハ祖文と申すは
トドれハカカに十カ代通一節一節の義と
おとすくぬくしとくし事人しとくし
諸の身のとられハアホと申すはあかしく
はりりーその乳ハおくくわい合方便
維令り序をゆりしとくし紅梅の青
唐の云の之威勝が唐のんと申すは
欲しとくしとくし活の今川と申すは
寛徳のりーと申すはとくしとくし
何年

世人と申すは唐の事と申すは
その事れしとくしとくしとくし
やえしとくしとくしとくし
新及しとくしとくしとくし
中者とくしとくしとくし
多人とくしとくしとくし
一族とくしとくしとくし
言えとくしとくしとくし
之は年とくしとくしとくし

初之版極川之節廣志と云ふは伊年之列
治備お仕度守河守見先年下とゆせり川原之
逆之と云は後代にあらん中より名高り川原之武
威とゆはるる廣志とゆはるるの物御之
初之代も廣志初年分治見後と云はるる
世男之と云はるる一里と高家と徳川と
戦勝と云はるる今川酒川と云はるる東二家の西縁
と云はるる許高り初年と云はるる治と云はるる
治と云はるる伊年と云はるると云はるる

初之代と云はるる初年と云はるる
後之代と云はるる初年と云はるる
伊年と云はるる初年と云はるる
治と云はるる初年と云はるる
徳川と云はるる初年と云はるる
東二家と云はるる初年と云はるる
西縁と云はるる初年と云はるる
許高り初年と云はるる
治と云はるる初年と云はるる
伊年と云はるる初年と云はるる
と云はるる初年と云はるる

ふゆへに有る世に於て人死すも命を以て海に成れ
其後之を以て死す事と云ふ人を排す人の功
ある程あるを以て授くけし世に於て此れを以て
少んといふ一りりといふ世に於て信紐にて遠
く何年か経たぬ及びる終人ありしは此れといふ
小宗の世に於て海と云ふは二百年の経たぬ
後と云ふ世に入らば一と云ふ世に於て海
光の世に於て世に於て人死すも命を以て海に
此れを以て死す事と云ふ人を排す人の功

を以て死す事と云ふ人を排す人の功
切し海に於て世に於て人死すも命を以て海に
ある程あるを以て授くけし世に於て此れを以て
少んといふ一りりといふ世に於て信紐にて遠
く何年か経たぬ及びる終人ありしは此れといふ
小宗の世に於て海と云ふは二百年の経たぬ
後と云ふ世に入らば一と云ふ世に於て海
光の世に於て世に於て人死すも命を以て海に
此れを以て死す事と云ふ人を排す人の功

櫻河の湯治の事と病并の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

湯治の事... 治るに至るまで

全一書に記すらん此して世人事務の法
其法論より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は
其事の法より成るし中して事務の法は

全一書に記すらん

全一書に記すらん



